

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02357

研究課題名(和文)16世紀の社寺縁起絵巻に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental Research on the 16th Century's Engi Emaki

研究代表者

本井 牧子(MOTOI, Makiko)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：00410978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、京都嵯峨野清涼寺所蔵の『釈迦堂縁起』絵巻を主たる研究対象として、絵と詞との両面から作品を精読し、作品の総合的理解を目指すものである。日本文学研究者による詞書の注釈的な読解と、美術史研究の知見とを合わせることで、この絵巻が、清涼寺本尊の釈迦像と、それを拝見する人びととの「縁」を強調するべく、綿密に結構されたものであることがあきらかになった。そしてその結構が『真如堂縁起』に継承されるなど、先行の縁起を積極的に利用しつつ、あらたな縁起の創出を試みるという、16世紀における社寺縁起絵巻製作の具体相が浮かび上がったことも、研究成果のひとつである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、美しい絵と流麗な詞とによって構成される『釈迦堂縁起』を、絵とテキストとの両面から検討し、その結果を注釈というかたちで蓄積している。この成果をもとに、研究組織を拡大して問題意識を深化させた研究課題が進行中であり(2019年度基盤研究(C)16世紀の社寺縁起絵巻の総合的研究)、将来的にはその成果を注釈というかたちで社会に還元することを目指している。

研究成果の概要(英文)： This research aims at a comprehensive understanding of the work focusing on "Shakado Engi", an emaki (illustrated handscrolls) of the Sagano Seiryōji Temple in Kyoto as the main research object by reading the work from both sides of the pictures and writings. By combining the annotative reading of the writings by Japanese literary researchers with the knowledge of art history research, this emaki emphasizes the "En" (relationship) between the main Buddha statue of Seiryōji Temple and the people who see it which is revealed to be a well-organized one. And the fact that "Shinyodo Engi" inherited the structure has unveiled the concrete aspect of the 16th-century shrines and temples Engi emaki, which attempts to create new emaki, is also one of the research results.

研究分野：日本文学

キーワード：縁起絵巻 社寺縁起 釈迦堂縁起 真如堂縁起

1. 研究開始当初の背景

社寺の縁起を絵巻に仕立てるといふ営為は、中世を通じて広く行われてきたが、15世紀後半から16世紀になると、奥書その他により、絵師や詞書筆者についての情報が得られる絵巻の遺存例が増えてくる。なかでも、『真如堂縁起』は、大永四年(1524)の奥書により、その制作事情がほぼ判明する点で貴重な絵巻である。この絵巻は、真如堂住持昭淳が画工掃部助久国に命じて描かせたものであり、詞書は、定法寺公助が起草したものを、後柏原天皇、伏見宮邦高親王、青蓮院尊鎮、三条西実隆、そして公助本人が揮毫したことが知られる。詞書筆者として名を連ねる人々は、血縁的、法脈的に近い関係にあり、さらに、同時代のさまざまな縁起絵巻の制作にかかわっていたことが指摘されている(榊原悟「『真如堂縁起』概説」、続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇5、『清水寺縁起 真如堂縁起』、中央公論社、1994年)、『北野天神縁起』(1503年)、『清水寺縁起』(1520年)、『当麻寺縁起』(1531年)、『桑実寺縁起』(1533年)などに代表される縁起絵巻が、これらの人物の周辺で陸続と生み出されているという状況が確認されていた。

こういった研究状況を受け、これらの16世紀に制作された絵巻群の読解においては、成立圏を共有するほかの絵巻を参照するという方法が有効なのではないかとの視点をもつにいたった。そこで、先に挙げた『真如堂縁起』起草者である公助が詞書筆者であると推測されている『釈迦堂縁起』を主たる対象として、詞書および絵の注釈的読解を開始することとした。

『釈迦堂縁起』は、奥書等はないものの、その画風や書風から、絵は狩野元信、詞書は公助との見方が通説となっている。その成立は、詞書本文の記述から永正十二年(1515)頃とかんがえられており、『真如堂縁起』奥書の大永四年(1524)とも比較的近接する。絵に関しては、『真如堂縁起』と『釈迦堂縁起』とに共通する図様が多く見られることから、『真如堂縁起』が『釈迦堂縁起』の影響下に成立したことが確実視されており、そこに公助の仲介があったことも推測されていた(榊原前掲解説)。その一方で、両者の関係については、公助のかかわりや、絵の影響関係の指摘にとどまっており、作品内部の読みにまで踏み込んだ研究はみられなかった。しかしながら、両者にはテキストの面においても、構成や方法上、共通する部分が多く、それは絵巻そのものの性格をかんがえる上で、軽視できないものと予想された。そこで、これらの共通点が、縁起絵巻制作の意図と深くかかわるものとの見通しのもと、本研究をスタートさせた。

2. 研究の目的

本研究は、16世紀に制作された社寺縁起絵巻のうち、『釈迦堂縁起』を主たる研究対象として、成立圏の近接する『真如堂縁起』をはじめとする同時期に制作されたほかの縁起絵巻をも参照しつつ、絵巻の絵と詞とを注釈的に読み進めることで、作品そのものの読みを深化させることを主たる目的とする。あわせて、縁起絵巻制作の具体相をあきらかにすることをも目指した。

3. 研究の方法

(1) 16世紀の縁起絵巻関連資料収集・整理・データ化

成立圏の近接した複数の縁起絵巻の絵と詞書とを参照可能な状態に整えるために、公開されている資料やデジタルデータなどの複製物等を利用しつつ、必要に応じて新規撮影なども行い、データを収集した。あわせて『釈迦堂縁起』と『真如堂縁起』というふたつの縁起絵巻に関与した定法寺公助関連の資料の収集をも行った。

(2) 『釈迦堂縁起』・『真如堂縁起』の注釈的研究

研究代表者の本井牧子、連携研究者の金光桂子、柴田芳成を中心として、日本文学、美術史学の研究者による研究会を組織して、輪読を行った。『釈迦堂縁起』全巻のなかでも典拠不明の段が大部分を占める巻六から輪読を開始し、詞書本文のテキストを整えた上で、注釈を作成した。

(3) 研究成果の共有

『釈迦堂縁起』をはじめとする縁起絵巻を多角的に分析するために、研究会のメンバーそれぞれの問題意識から調査研究を進めた。その結果については(2)の研究会において報告を行い、成果を共有した。研究会外部からも日本文学や美術史の研究者を招聘し、最新の知見を得ることにつとめた。

4. 研究成果

(1) 16世紀の縁起絵巻関連資料収集・整理・データ化

16世紀成立の社寺縁起を中心に、その研究成果などをも含めて資料・データを収集、蓄積し、研究会内部で共有できるかたちを整えた。『釈迦堂縁起』と密接な関連を指摘されている『優填王所造梅檀釈迦瑞像歴記』書陵部蔵本、後世の享受の様相を伝える東京国立博物館蔵『釈迦堂縁起』模本や近世の版本といった資料の画像データは、注釈作成の際に大いに役立った。

また、定法寺公助については、天台の資料を中心に関連記事を抽出し、年譜作成のための基礎資料を整えた。『釈迦堂縁起』を描いた狩野元信との関係が注目されていた坂浄運という医者が、公助とも関わりがあったことが判明するなど、絵巻周辺の人的ネットワークが見えてきた点は成果のひとつである。

(2) 『釈迦堂縁起』・『真如堂縁起』の注釈的研究

研究代表者、連携協力者による準備のための打ち合わせにつづいて、合計5回の研究会を開催し、詞書の輪読を進めた。作成した注釈原稿は研究会の参加者で共有しつつ、将来的な公刊を視野に入れて更新を重ねている。

詞書各段の検討を進めるなかで、『釈迦堂縁起』が、『宝物集』『沙石集』といった説話集、隣接する寺院の縁起や『太平記』にみられる伝承などを素材として、詞書を再構成している様子が具体的に浮かび上がってきた。また、歴史学や美術史の成果とあわせ読むことで、釈迦像の造形自体が説話内容に投影されている例などもみえてきた。さらに、絵巻成立当時における仏教界の動向を反映する可能性なども指摘されるなど、今後の詞書分析における重要な視角が多数提供された。

このように各段の注釈的な読解を積み重ねた結果、『釈迦堂縁起』がきわめて緊密に構成されていることもあきらかになった。詞書においては、釈迦堂の本尊である釈迦瑞像の生身性を核として、瑞像を「拝見する」ことにより保証される本尊との縁をことさらに強調する姿勢が全巻にわたって貫かれており、この絵巻が一貫した意図のもとに制作されたことがうかがわれる。このことは、絵の分析により、『釈迦堂縁起』が、実際に尊像を拝見する場としての開帳に供された可能性を指摘する美術史の側からの指摘とも符合する（並木誠士「釈迦堂縁起 釈迦信仰の増幅」『美術フォーラム』15、2007年5月）。

さらに、この瑞像拝見の機会の稀少性を示すために用いられる、瑞像を目の前にしながらその姿を知覚できないという話型が、『真如堂縁起』にも繰り返しみられることから、これらのふたつの縁起絵巻が、テキストの面でも密接な関連性をもつことが推測された。『真如堂縁起』が、絵のみならず、結構といった全体の構想にかかわる部分においても、『釈迦堂縁起』を範とした結果とかがえられる。

以上のような検討を経て、従来、絵の面からのみ注目されがちであった縁起絵巻相互の関係が、テキストのレベルにおいても密接なものであることがあらためて確認された。さらに多くの縁起絵巻に検討対象を広げ、テキストを綿密に比較することで、絵巻制作の背景・環境などがよりいっそう浮かび上がってくることが予想される。当該時期の絵巻をかんがえるうえで、有効な視点が得られたことは、本研究の重要な成果である。

(3) 研究成果の共有・発信

研究期間中に開催した研究会では、毎回、『釈迦堂縁起』およびそれに関連するテーマで研究報告が行われた。日本文学研究者からは、公刊されているテキストの問題点、釈迦瑞像をめぐる説話伝承の展開、美術史研究者からは、『釈迦堂縁起』の画面構成、公助が関与した絵巻、図像の典拠といったテーマで報告があった。成果の一部は論文として公表して学界に発信した。

以上のように注釈的研究を進めるなかで、研究会参加者の間で、問題意識の深化・共有がはかれることとなり、日本文学のみならず、美術史研究者の協力をも得た上で、研究組織を拡大し、さらに精緻な注釈を進める必要性が認識されるにいたった。そこで、研究計画最終年度前年度応募として、本研究を発展させた研究課題を申請する運びとなった。今後は、後続の研究課題である基盤研究(C)「16世紀の社寺縁起絵巻の総合的研究」において、『釈迦堂縁起』を多角的に定位することを目指して研究を継続する計画である。将来的には、注釈の成果を公刊して成果を学界のみならず社会に還元したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 本井牧子	4. 巻 16
2. 論文標題 志水文庫蔵『六道変相八大地獄図』の信仰とその淵源	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本仏教総合研究	6. 最初と最後の頁 56-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 本井牧子	4. 巻 10
2. 論文標題 見えない仏 仏像の霊験を語る話型	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 8-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 本井牧子	4. 巻 208
2. 論文標題 海を渡る仏 『釈迦堂縁起』と『真如堂縁起』との共鳴	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア遊学『ひと・もの・知の往来 シルクロードの文化学』	6. 最初と最後の頁 205～216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 本井牧子	4. 巻 86-5
2. 論文標題 『釈迦堂縁起』とその結構	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 276～289
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田芳成	4. 巻 86-5
2. 論文標題 『和州寺社記』の一つ書き記事 縁起書から地誌へ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 333～346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金光桂子	4. 巻 23
2. 論文標題 『逢坂越えぬ権中納言』の主人公と『源氏物語』 「さまよき人もなかりける」をめぐって	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 京都語文	6. 最初と最後の頁 174-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 本井牧子
2. 発表標題 日本中世的《十王經》及其發展
3. 学会等名 第五屆佛教文獻與文學學術研討會 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本井牧子
2. 発表標題 判官物の絵巻化 『義経奥州落絵詞』の形成
3. 学会等名 説話文学学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本井牧子
2. 発表標題 志水文庫蔵『六道変相八大地獄図』の信仰とその淵源
3. 学会等名 日本仏教綜合研究学会 第15回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 本井牧子
2. 発表標題 『金蔵論』とその構成
3. 学会等名 第四屆佛教文獻與文學國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 金光桂子（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 202
3. 書名 新天理図書館善本叢書24『奈良絵本集二』	

1. 著者名 金光 桂子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 410
3. 書名 中世の王朝物語 享受と創造	

1. 著者名 絵詞研究会編（金光桂子、柴田芳成、本井牧子ほか分担執筆）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 432
3. 書名 時雨物語絵巻の研究	

1. 著者名 神戸説話研究会編（柴田芳成、本井牧子ほか分担執筆）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 568
3. 書名 近世寺社伝資料『和州寺社記』・『伽藍開基記』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	柴田 芳成 (SHIBATA Yoshinari) (70448158)	大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授 (14401)	
連携研究者	金光 桂子 (KANAMITSU Keiko) (30326243)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	